

# かたりべ131

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



特別展示では篆刻を紹介しています



石の美しさにも注目してください



「揮毫された資料」では豊島区所縁の人物の書跡を中心に展示しています



百年書法裏 万事資料中

2018年度第三回収蔵資料展開催中

郷土資料館では年度と元号をまたいで、二〇一八年度第三回収蔵資料展『書く』というこ』を五月二二日(日)まで開催しています。今回の収蔵資料展では日常の動作である「書く」をテーマに設定し、様々な収蔵資料をご紹介します。

展示室前半では「書く」ために要るものは何かという視点で、筆墨に関わる道具や初等用の教科書であった往来物などの書籍を展示しています。展示室後半では「書くこと」によって出来るもの」という事で、「記録された資料」と「揮毫された資料」をテーマに展示を行っています。こちらでは、掛軸や扁額など初公開となる資料も多く展示しています。

昔は当たり前のように生活の中で墨をすり、筆で文字を書いていましたが、現代ではあまり日常的ではありません。展示を通して、日常の中で筆墨を使っていた時代に思いを馳せながら、「書く」という動作を振り返ってみたいだけだと思います。

また、会期中レファレンスルームでは特別展示「鈴木素白と篆刻」を実施します。開館一周年を迎える鈴木信太郎記念館所蔵資料の中から、鈴木信太郎(号・素白)が手掛けた篆刻印を展示しています。「書く」と「彫る」が密接に関係した篆刻の美しさと、フランス文学者・鈴木信太郎ならではの印面の独自性をご紹介します。

(郷土 井坂)

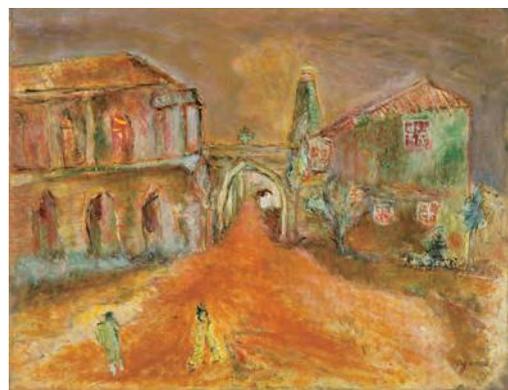
# 作品を見る読む

## 15 小熊秀雄

「池袋モンパルナス」という言葉を創出したのは小熊秀雄おぐまひでお（一九〇一—一九四〇）だとされています。小熊は北海道に生まれ、文筆業で成功する野心を抱いて上京し、二七歳から現在の豊島区内に住むようになりしました。詩人と名乗り、文学や美術の批評も手掛けた小熊は、文章での活動が有名かもしれませんが、芸術活動全般に関心が高く、自身でも油彩、水彩や墨汁スケッチなども相当数制作していました。油彩や水彩の作品は幻想的に色が交じり合う心象風景で、夢見心地な仕上がりにあるのに対し、墨汁は現実の街中で見かけた人々や街並みなどの主題を、即興で端的に特徴を引きだし、単一の線による劇画のような作風です。



A 小熊秀雄《立教大学 (5)》1930年代 豊島区蔵 紙、墨



B 小熊秀雄《夕陽の立教大学》1937年 豊島区蔵 キャンパス、油彩



C 小熊秀雄《立教大学 (1)》1930年代 豊島区蔵 紙、墨



図1 《立教学院敷地平面圖》立教学院 1937年5月  
出典：『立教学院学報』第4巻第4号 提供：立教学院展示館

が、池袋から西側の長崎近辺を選ぶことが多かったようです。立教学院の敷地は当時から地域住民の通り道として開放され、小熊も夕方、家から出て池袋駅周辺の繁華街に向かう際の通り道としていたのです。立教学院は一九一〇年に池袋の校地購入以来、関東大震災や第二次世界大戦の被害、キャンパス計画の進行で建築物が部分的に入れ替わっています。そのため小熊の作品はかつてのキャンパスの姿を伝える資料的側面を備えています。それらの作品が実際のどの場所を描いているのか、一九三〇年代後半の写真や《立教学院敷地平面図》（一九三七年五

月・図1）をもとに調査することができました。

図1の赤いアルファベットは当ページの作品に対応し、赤矢印は絵それぞれの小熊の視線の方向です。丸印の数字は建築物の名称で、①食堂（現・第一食堂）②仮校舎（現存せず）③校舎（現・本館／モリス館）④礼拝堂（諸聖徒礼拝堂、現・チャペル）⑤正門⑥一号館（校宅一号館、現・ライフスナイダー館）となっています。Cの右上に見える屋根に付く四角（煙突）が二本見えるため一号館と確定しました。二つの建物を繋ぐ廊下と画面右側の建物から伸びる角ばった塔矢という特徴からBの視線の方向が定まります。Aは画面両脇にある木造の建物から、仮校舎だと判断でき、東側から描か

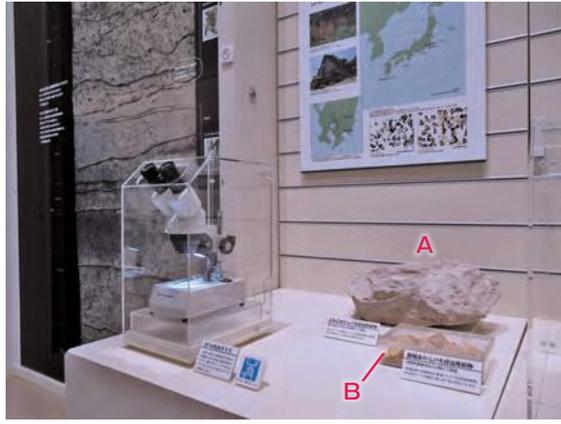
れたと分かりますが、更に絵の中の影の向きにより午前中の風景ではないかと推測されます。立教学院を通る往来の道の日々の切り替えになっていたのでしょうか。夕方に池袋駅まで行って飲みあかし、また朝に帰ってくるような、小熊の生活を想像してみたくります。

（美術 堀口）

【主要参考文献】豊田雅幸著『立教の学び舎―キャンパスと校舎の移り変わり―』立教学院 二〇一三

立教展示館の豊田雅幸氏には、資料提供、場所の同定作業に多大なご教示を頂きました。

## 入戸火砕流から 生まれた堆積物



写真① 常設展示室の剥ぎ取り標本（左）と火砕流堆積物（右）

常設展示室の地層剥ぎ取り標本は、(仮称)芸術文化資料館建設予定地(豊島区千早二丁目)から採取しました。地層内には風に乗って降下した火山灰である始良カルデラの堆積がわずかにみられます。これは鹿児島湾北部の始良カルデラが約二万六千年前から二万九千年前の噴火で噴出されたと考えられ、豊島区のみならず、日本列島全域に噴火時に発生した火山灰が広く分布しています。そのため、地層を観察する際に、年代を考えるとうえでの重要な指標となります。

剥ぎ取り標本の右隣に鹿児島県志布志市有明町採取の白い石(写真①A)と宮崎県都城市採取の黄色い砂(写真①B)があります。Aは持つてみると表面はざらざらしていて動かすたびにぼろぼろと砂のようなものが落ちていきます。また、表面を良く観察すると少し明るい色の石が混入していることがわかります。(写真②青丸)。Bは黄色く、指でつまんで擦ってみると粒子がかなり細かいことがわかります。この二点は、始良カルデラが噴火した際に生じた入戸火砕流による堆積物の一部です。同じ入戸火砕流が由来ですが、姿が全く異なります。



写真② 始良カルデラと火砕流堆積物の採取地点

火砕流とは、高熱の火山灰や溶岩片、火山ガス等の火山噴出物が混合して、山肌に沿って斜面を高速で流れ落ちる現象です。火砕流の温度が数百度にも達することから、熱雲とも呼ばれます。火砕流堆積物は熱と圧力によって溶結の程度が変化します。火砕流が地表に堆積すると、地表に近いものは、新たに上部に堆積する火砕流の圧力と火砕流自身の熱で軟化し、押し延ばされます。しかし、その上から覆いかぶさった火砕流は、熱があっても圧力が少ないため、溶結が弱くなります。そのため、地表に近い火砕流堆積物は溶結が弱く、下の層になるにつれて溶結が強くなる傾向があります。Aは、弱溶結の溶結凝灰岩と呼ばれます。下部の溶結凝灰岩層が地表に露出した部分から採取しました。展示しているAの表面で確認できる石は、噴火時に火砕流より先に噴出した大隅降下軽石が火砕流

に飲み込まれ、そのまま溶結して火砕流堆積物の中に残ったものだと考えられます。志布志市夏井海岸では、溶結凝灰岩が大隅降下軽石層と共に約五〇メートル程度の崖を形成しています。溶結凝灰岩は加工がしやすく、南九州では古墳時代の石棺や建築用の土台石などの石材として広く用いられていました。夏井海岸では石切の痕跡も見ることができます。

Bは、地表で採取されたため、非溶結の細かい粒状になっています。非溶結の火砕流堆積物は色が白いことからシラス(白砂)と呼ばれていますが、当館で展示しているものは風化によって主成分の火山ガラスが黄色く変色したものになります。シラスは水分や栄養分を留める力が乏しいため稲作には適さず、サツマイモや大豆など、やせた土地でも育ちやすい作物が栽培されています。

始良カルデラの噴火時に発生した入戸火砕流は、鹿児島県のみならず宮崎県や熊本県の一部にまで到達し、広大なシラス台地を形成しました。火砕流は一部の地域で一四〇メートルもの層を形成しており、周辺の環境を大きく変化させました。この大きな火山活動の痕跡が、豊島区の地層にも残されているのです。

(郷土 水吉)



## 「鈴木信太郎記念館」の資料たち

「半獣神の午後」(初版)

第17回 鈴木信太郎の愛蔵書

ステファヌ・マラルメ(作)、エドゥアール・マネ(挿画)



『半獣神の午後』(原題 L'Après-midi

d'un Faune) (以下、『半獣神』)は、フ

ランス近代の象徴主義を代表する詩人、

ステファヌ・マラルメ(一八四二—一八

九八)が一八七六年に発表した代表作で

す。信太郎は、この詩を「フランス詩歌

の最高水準を示す作品の一つ」と高く評

価しています。

マラルメに魅せられた信太郎<sup>①</sup>が、『半

獣神』の翻訳に取り組むようになったの

は、一九一九(大正八)年の夏ごろから

でした。彼は、「あまりに純粋な表現」ゆ

えに難解なこの作品の訳出のために苦吟

し、友人の菊池香一郎宛ての手紙にもそ

の苦労を書き綴っています。訳詩は、

「フォオヌの午後 相聞牧歌」と題して一

九二二(大正一一)年の『明星』一月

号で初めて発表された後、何度も稿を改

めて出版されました。

マラルメの生前に本国で三回発行され

た単行本のうち、一九五〇限定の初版

(二八七六年)(**図1**)は、発行当初から

愛書家の垂涎の的となっています。信太

郎もこの書物について、「この詩集の美し

さ、寂のある、深さのある美しさは、比

類がない。高雅な稀有な清楚な完璧の書

物である。」と絶賛しています。

近代美術の巨匠エドゥアール・マネが

手がけた挿絵四点のうち、美濃紙に別刷

りされた一点には、蘆の間に座って水波

女たちの様子を覗く半獣神の姿が描かれ

ています(**図2**)。また、

蓮の葉が描かれた蔵書

票には、マラルメの自

筆でシリアルナンバー

が付されています。

この本の装丁へのこ

だわりも相当なもので

した。タイトルが純金



図2 マネの描いた半獣神

だわりも相当なものでした。タイトルが純金

押箔刷された表紙には日本奉書紙が、本文には和蘭紙(一七五部)と和紙(鳥子紙、二〇部)が用いられ、黒と薔薇色の絹の紐が葉のように挟まれています。信太郎が『半獣神』の初版本と初めて出逢ったのは、パリ留学中(一九二五—二六年)のことでした。愛書家の古書店主エドゥアール・シャンピオン(一八八二—一九三八)の書齋にあった数多の稀覯本の中でも「一層燦然と光つてゐた」といいます。父危篤の知らせを受け、フランスから急遽帰国した信太郎。その際別送した稀覯本約千冊を船火事で失い、一時は軽い神経衰弱に陥つたものの、火事に対して万全の備えを施した書齋を建設し、改めて注文した貴重書が一冊一冊と到着するにつれ、その傷は癒えていったといいます。なかでも信太郎に大きな喜びを与えたのが、この『半獣神』の初版でした。シャンピオンの助力によって一九三二(昭和七)年頃にこの本を入手した信太郎は、自らが翻訳した日本語版も「それに負けない美本に仕立ててやらうと野心を起します。この豪華翻訳本は、翌一九三三(昭和八)年に江川書房から一〇〇部限定で出版されました(**図3**)。装丁は原典初版に忠実に倣いながらも、さらに上質の

紙を使用し、挿絵も原寸通りで、自ら携わった書物の中で一番気に入っていると述べています。

完成した日本語版の『半獣神』を、さっそくシャンピオンに贈った信太郎。愛書家は驚き、翌年三月の週刊新聞『コメディア』にこう書きました。「東京から本当のジャポニ紙に印刷されて、奇怪な美麗極まる本が贈られて来た。神秘的な日本文字の羅列に先立って、L'APRES-MIDI D'UN FAUNEと印刷されてゐる。間違へてはいけないうぞ、それは一八七六年ドレンヌ書房刊行のあの有名な初版本そっくりそのままだ」。 (郷土 石井「里」)

※図1・2は、獨協大学図書館「鈴木信太郎文庫」所蔵の原本の複製資料(鈴木信太郎記念館所蔵)より使用。

① 信太郎とマラルメに関して、詳しくは「旧鈴木家住宅の資料たち第四回」(「かたりべ」一一八号、二〇一五年)を参照。

【参考文献】鈴木信太郎『半獣神の午後』研究、「半獣神の午後其他」要書房、一九四七年/同「愛書雑談」、「蔵書随筆」、「私の本」、「エディシオン・オリジナルといふ事」すべて『鈴木信太郎全集』第五卷(大修館書店、一九七三年)に再録/CHAMPION, E. « Une belle édition japonaise de "L'après-midi d'un faune" », COMŒDIA, 15 mars 1934.



「半獣神の午後」表紙

図1 原典初版



図3 日本語版

## 新資料紹介

桃源社版『江戸川乱歩全集一〇』「あとがき」草稿

豊島区ゆかりの探偵小説家江戸川乱歩は、一九三四（昭和九）年から一九六五（昭和四〇）年に亡くなるまでの約三〇年間に池袋の地で暮らしました。引越した魔であった彼の終の棲家は、現在も立教大学の敷地内にあります。

今回は、文学・マンガ分野で新たに収集した江戸川乱歩の草稿をご紹介します。本資料は、一九六二（昭和三七）年六月に桃源社から出版された『江戸川乱歩全集一〇』に収録されている「あとがき」の草稿です。この全集には、「人間豹」「屋根裏の散歩者」「人でなしの恋」「恐ろしき錯誤」「目羅博士」「木馬は廻



図1 桃源社版『江戸川乱歩全集10』  
「あとがき」草稿 全9枚

る」が収録されています。生前最後に出版された全集で、乱歩自身による子細な校訂がなされているため、現在ではこの全集を乱歩作品の底本とすることも多いようです。

「あとがき」草稿は、すべて欄外左下部に「江戸川乱歩」と印字された原稿用紙に書かれています。原稿用紙上部に記載された頁は一三までありますが、そのうち三頁から六頁までは欠損しています。状態は良く、乱歩が推敲を重ねたあとを見てとることが出来ます。実際に出版された桃源社版『江戸川乱歩全集一〇』の「あとがき」と比べてみると、草稿段階からあまり手を入れずに掲載していることがわかります。

これまでに出版された全集や、桃源社版全集を出版するに至った経緯などが子細に書かれたこの「あとがき」からは、乱歩の「データ魔」としての一面も見てとることが出来ます。乱歩の残した資料に『貼雑年譜<sup>①</sup>』という、自作の年譜や著者の関連記事、書類類など乱歩自身にまつわるものほぼすべてを貼りこんだ全九冊の大きなスクラップブックがあります。

これを見ればいつ頃乱歩がなにをしていたのか、一見してわかるようになっており、一九四一（昭和一六）年頃から作成されたこの資料の情報をもとに、「あとがき」を書いたと推察されます。

話を戻すと、欠損している三頁から六頁の部分では桃源社版『乱歩全集』の校訂と、「人間豹」の解説が書かれていました。この頃、体調を崩していた乱歩は新作の執筆からは離れていたため時間にも余裕があり、自ら校訂を行うことができたと書いています。戦中、検閲によって削除された部分などは、初版本に則り補正したとも述べています。

七頁以降では、収録作品について自身で解説を行っています。基本的なパターンとしては作品ごとに初出誌、執筆時の状況と作品の概要が手短かに述べられています。特にこの巻は、初期の作品が多く収録されているため、当時のエピソードなどを織り交ぜ、探偵小説作家として歩み始めたころの自身を回想しているかのような記述が目立ちます。収録作品のひとつである「恐ろしき錯誤」は、デビュー作の「二銭銅貨」と「一枚の切符」が当時の『新青年』編集長森下雨村から高い評価を得たことに気をよくした乱歩が「大いに気負って書いた三番目の作品」で

した。しかし、作品の出来はあまり良くなかった。森下からの評価も低かったため、この作品によって「自分の力にたいへん自信が失われ、一時は、もう小説を書くまいと思っていた」と述べています。『探偵小説四十年』では、この作品について「私の全作家生活を通じて、一番乗気になって、書きたくてたまらなくて書いたのは、恐らくこの作品であったといってもよいと思う」と述べており、自信に満ちた作品があまり評価されなかったことに対する、乱歩の落胆ぶりがうかがえます。

二〇一九年八月三日（土）から九月四日（土）に開催する文学・マンガ分野の企画展では、本資料の初公開を予定しています。乱歩を中心として、豊島区ゆかりのミステリー作品を紹介します。「かたりべ」でも企画展の情報を随時お伝えしていきます。（文学・マンガ 佐伯）

① 太平洋戦争に伴い執筆活動の停止を余儀なくされた乱歩は、自伝としてこのスクラップブックの制作にとりかかった。平井太郎（江戸川乱歩）「序」『貼雑年譜』（復刻版）東京創元社、二〇〇一年。

【参考資料】『江戸川乱歩全集一〇』桃源社、一九六二年。

『貼雑年譜』（復刻版）東京創元社、二〇〇一年。

江戸川乱歩『江戸川乱歩全集二八巻 探偵小説四十年（上）』光文社文庫、二〇〇六年。

# 来館者の声から

## リニューアル後の反応

郷土資料館は、二〇一七年一〇月のリ

ニューアルオープンから一年半を迎えます。オープンから一年間の来館者数は、二万八九〇六名で、休館前の二〇一四年度に比べて約二・四倍の増加となりました。企画展と収蔵資料展のPR活動も手伝って集客が伸びたものと思われま

す。当館では、展示室入口で任意のアンケート調査を行っています。今回、オープンから翌年七月の収蔵資料展終了までの計一九六枚の集計を行いました。

◇当館を知ったきっかけとして、区や当館のホームページが、「広報としま」やポスター・チラシよりも多く、インターネットを活用した広報活動が重要であることが再認識しました。また以前に当館を見学した人が四四%、今回初めて見学した人が五五%で、「再開を楽しみにしていた」との声も多く寄せられました。

◇来館者の年齢層をみると六〇代、七〇代が多い一方で、三〇代～五〇代と一〇代の来館者が増えています。としま産業振興プラザの利用者や、企画展「学びと暮らし」の昔の暮らし体験展示を目的に来館した親子連れが多かったことが理

由として考えられます。

◇また来館者の住所をみると、区民が四〇%弱、東京二三区全体では約七〇%を占めています。続いて埼玉県と東京都内(二三区外)が多いのは、池袋という立地条件が影響していると思われま

す。◇展示の感想として、八五%が好印象・高評価でした。「展示室が明るくなった」「きれいになった」「見やすくなった」と

いう声をもっとも多く、以前の暗い展示室のイメージが払拭できたのではないかと思います。また「豊島を知ることができた」「古代からの豊島区の変遷がよくわかる」「豊島区域の移り変わりが良くわかりました」などの声も多く、通史展示を行ったことにより、豊島区の歴史への興

味と理解がより一層深まったのではないかと感じています。

また「さわれる展示が良かった」「楽しかった」「なつかしい」「落ち着いた雰囲気でした。小学校三年生の郷土学習の一環として、昭和三〇年代の暮らしを六畳の和室で再現展示しましたが、五〇代以上の

来館者に好評で、展示の前で会話が弾む光景が見られました。資料を使った体験

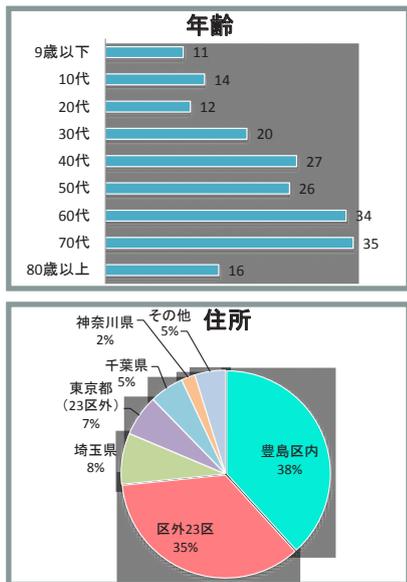
展示は、劣化や破損などのリスクを伴いますが、実物をもつ歴史の重みと迫力は、複製では替えられない価値と魅力があります。今後も実物資料に触れる機会を出

来る限り設けていきたいと思ひます。一方、展示への要望・意見として、古地図や昔の写真をもつと展示してほしい、映像で豊島区の歴史を紹介してほしい、

解説文字が小さくて読みづらい、展示説明員がいると良いなどの

声がありました。今後展示替えの際に少しずつ改善していきたいと思ひます。(郷土 横山)

※展示リニューアルの詳細は、当館の研究紀要『生活と文化』第二八号に掲載します。



## 編集後記

『かたりべ』一三一号をお届けいたします。本年度も最終号となります。

ここで一つお知らせがあります。本誌一四号より三年半に渡り掲載してまいりました「旧鈴木家住宅」の資料たち及び「鈴木信太郎記念館」の資料たちは、本号第17回をもちまして『かたりべ』での連載を終了いたします。記念館の開館準備期内と開館後を通じて、皆様にはご愛読いただき誠にありがとうございます。

郷土資料館の来館者の中にも「記念館の連載が載っている号の『かたりべ』が全てほしい」などのお問い合わせもこれまで何度かありました。記念館が無事開館一周年を迎えられること、皆様からの関心をいただいていること、大変嬉しく思います。またこの度、新たに記念館の展示パンフレットも発行いたしました。記念館へご来館の際には展示と併せてお読みいただければ幸いです。(編集 上田)

かたりべ  
No.131

2019年3月22日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan>



東京アジア文化都市2019 豊島  
Culture City of East Asia 2019 Toshima  
としまの文化をいかに伝えるか